

「横浜トリエンナーレ」を応援し、盛り上げる活動の一つに、ボランティア活動＝サポーター活動がある。サポーター活動の一環に「トリエンナーレ学校」がある。サポーター活動に沿った講座等を開催して、活動基盤を形成する趣旨がある。

以下は、過日、ヨコハマトリエンナー2014 のアーティスティック・ディレクターに就任した森村泰昌を主たる講師にして開催された『横浜トリエンナーレ学校特別編 「ヨコトリ物語」が始まった！さあ、たいへん！』の私的記録。録音、写真撮影は禁止されているので、手書きメモから復元しており、正確性に課題はありと承知する。後日、公式記録が出ると思うが、それまでの暫定として頂きたい。

当日の進行は次のとおり。

日時：2013年3月6日（水）19：00～21：00

会場：ヨコハマ創造都市センター（YCC）3F スペース

次第：1. はじめに

帆足亜紀（横浜トリエンナーレサポーター組織委員長 事務局長）

2. レクチャー 「ヨコトリ物語」が始まった！さあ、たいへん！

森村泰昌（ヨコハマトリエンナー2014 アーティスティック・ディレクター）

3. トーク

森村泰昌（ヨコハマトリエンナー2014 アーティスティック・ディレクター）

天野太郎（横浜トリエンナーレ組織委員会 事務局次長）

山野真悟（横浜トリエンナーレサポーター事務局 ディレクター）

4. 事務局より連絡

レクチャーは1時間ほど。トークは1時間弱、あらかじめ会場から集めた質問用紙の幾つかを取り上げて、森村泰昌が回答する形式だった。

以下、レクチャーの大まかな記録。文章にすると判りにくい点は、多少、言葉を補っている。文責は私にあるが、責任を問われても何かできる事はない。承知願いたい。

2014年横浜トリエンナーレのアーティスティック・ディレクターに就任し、2012年12月の記者会見で公表された。それ以来、打ち合わせを重ねている。2013年の夏前に記者会見でメインタイトル・概要を発表したい。今日の講座の内容は迷った。私は、キュレーターを務めるのは初めての経験。作家としての今までの立場とは逆になる。

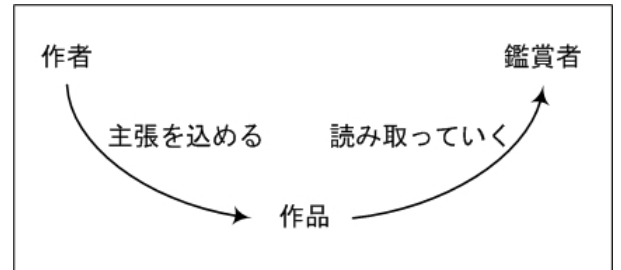
マルセル・デュシャンについて語りたい。私は研究者ではないが、それを手がかりにして5つばかり話したい。実は虎の巻がある。「マルセル・デュシャンのレディーメイドー泉をどう語るか：河本信治：森美術館講座記録」（実物は未確認）。これから語ることは一点、デュシャンの作品「泉」（右図参照、出展：<http://ja.wikipedia.org/wiki/マルセル・デュシャン>）についてである。「泉」はリチャード・マットの偽サインで展覧会に出展しようとしたが、主催者に拒否されてスキャンダルになった。

詩人のオクタビオ・パスは「20世紀に大きな影響を与えたのはピカソとデュシャン。ピカソは多くの作品において、デュシャンは1点の作品において」と語った。「泉」は1917年の作品だが、その4年前のアーモリー・ショー（Armory Show、兵器倉庫を利用して開催されたため）から、準備が開始されている。それはアメリカの前衛芸術の先駆けで、デュシャンの油絵「階段を降りる裸体（1912年）」が展覧された。



1913年と言えば、カフカの火夫（池内紀訳では「失踪者」の第1章が火夫。一般的にタイトルが「火夫」「アメリカ」「失踪者と推移している）が書かれた。ニジンスキーが「ストラヴィンスキー：春の祭典」（作品名を聞き漏らしたが、この年に発表されて大きな話題になったのは春の祭典だろう）を振付・上演した。カーヴィンスキー「純粹芸術？」、プルースト「失われた時を求めて」、フッサール「現象学」草稿など、いろいろな動きがあった。松本によれば、「アーモリ・ショウで19世紀と20世紀の間に亀裂が生まれた。歪が起こった」。1917年には、デュシャン、ロシア革命、第一次世界大戦、アメリカは4月にドイツに対して宣戦布告した。デュシャンのスキヤンダルに学ぶことがある。

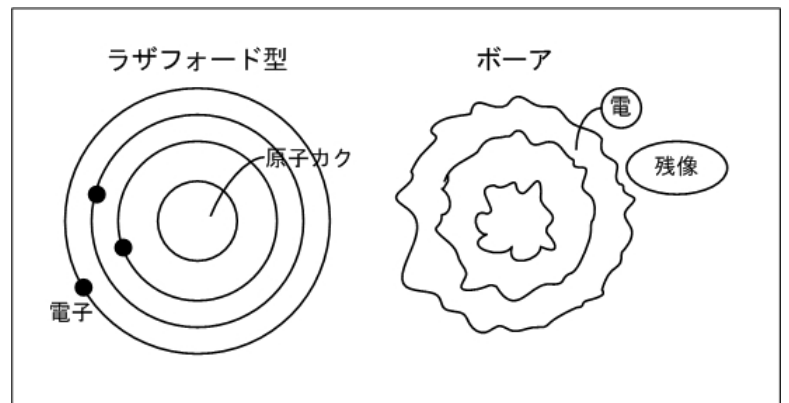
今年は、1913年から100年経過している。大変な時代と
思っている。私も、今は20世紀と21世紀の間の亀裂、そ
の中にいる。そこから教訓を得るなら、横浜トリエンナー
レも亀裂の中にいるべきであろう。「便器（泉のこと）」の
作品は、一般的に言えば何か。右図のように思う。「便器」
は、作品の中身は空っぽ、何も無い。芸術でないとの言説
が生まれている。100年経過する間に「便器」についてど
れだけ語られたことだろうか。空っぽだから入ってくるのであって、まるで白い本、オープンテキスト。いろいろ語られることで作品が育っていく。私の考えと違うと言う作者の上から目線が良くある。ダ・ヴィンチ「モナリザ」について多くの論文・言説がある。しかし、ダ・ヴィンチは何も言っていない。デュシャンと同じように空っぽ。作品たらしめているのは鑑賞者だ。「便器」が作品のように思うが、私はそれを取り巻く仕掛けこそが作品だと思う。



1917年の出展拒否は、「便器」が展示されなかったということ。鑑賞者は「便器」を見ていない。バックヤードに置かれていたが、会期後に無くなった。翌日、小冊子に「便器」の写真が掲載される。デュシャンは「便器」を持って帰り、写真を撮った。デュシャンは意図的に既製品のオリジナルは廃棄した。誰も見ていないのに。写真を手がかりに議論が進んだ。何十年かして、「便器」のレプリカを作って売り出した。ポンピドー、？、フィラデルフィアなどの美術館が購入した。手の込んだ仕掛けの全てが作品。仕掛けだけど中身は無い。

これはエンターテイメントだ。白い本は自由に書き込める。横浜トリエンナーレもこうありたい。一般的とは違う意味のエンターテイメントであって良いだろう。

ボーアとラザフォード。ラザフォードは(システムティック)で明快に説明できる気がする。ニューヨーク近代美術館の展示方法は、整然と時代に沿って入り口から出口に動かされていく。まさに年表。頭の中がすっきりする。しかし改めて考えると、そんなにすっきりしているか。



私は高校の時に印象派に触れ、それから現代美術、レンブラントと興味移った。時間順に美術を経験していない。ニューヨーク近代美術館の展示は選定されているが、別の選定をされると、別の見方になるだろう。ラザフォードの例のように。箸の正しい持ち方を考えてみる。始めは、いろいろな箸の持ち方をしていた筈だが、正しい持ち方が出ると、他は間違いになってしまう。ニューヨーク近代美術館の展示がそのようなもの。

デュシャンは仕掛け人、人がいろいろ話題にするうちに膨らんでいく。私達にはどちらがリアルだろうか。ラザフォード風にやればすっきりするが、そういうやり方が良いだろうか。「フォードシステム」と「便器」、リンクしているが時代にポジティブではない。「フォードシステム」や電子を研究しているわけでない。ダイレクトに取り組んでいない。戦争について語っていないが、今思えば、時代を反映していたのだろう。

デュシャンから学ぶこと。

1. 横浜トリエンナーレは20世紀と21世紀の亀裂の中で？
2. 横浜トリエンナーレは時代を反映していなければならない。
3. 横浜トリエンナーレはエンターテイメントでなければならない（迎合ではない）。
4. 横浜トリエンナーレは一方通行の広場であってはいけない。雲のようなもの。
5. 横浜トリエンナーレはデュシャンからの教訓は全て記憶し、全て忘れる。ただし、残像のように残らなければならない。

熱心にメモを取って貰ったが、離れたことは忘れてしまいたい。残像のように残るが。残像の集積がぼやっと残る。四角張ったものにはしたくない。夏前にまとまっていくので期待して欲しい。

以下、トークの大まかな記録。取り上げられた質問は以下の4点のみ。

質問：作家の作品はどう選ぶか。

森村：コンセプトに関わらないが、自信たっぷりはいや。反省する気持ちがなければいけないと思う。それが大事。謙虚な気持ちがあると、モニュメンタルな作品は生まれないと思う。小さな作品と言うことではない。個人的だが、反省ばかりでなく、良いなと思わなければ駄目。

質問：サポーターの可能性は。

森村：オープンにしておきたい。横浜トリエンナーレがあるならば、裏トリエンナーレがあっても良いかと、どこかで言っていた。例えばネット上で公開しても良いのではないか。関係者で打ち合わせがあれば、議事録にいろいろと書いてある。そういうものを公開して良いのではないか。もっと深く関わりたい人には、全部見ていただく。12日に会議がある。絞り込みたいがどうなるか。裏トリエンナーレが先行してよいか、タイミングはあるが。煮詰まるプロセスを共有してもらおうと盛り上がるのではないか。バックヤードを見せることは恥ずかしいことだが。

質問：横浜の魅力は。

森村：会場周辺は都会、ある種のニュートラルな感じ。逆に活用できる。その土地に意味、重みがある、例えばカッセル（現代美術の大型グループ展・ドクメンタが開催される）、光州（国際的な現代美術展・光州ビエンナーレが開催される）。あるいは自然が。重要なことだが、とらわれる不自由さもある。横浜でいろいろなことをやってみる。歴史につながる。もっと自由に。

質問：子供達に伝えることに何があるか。

森村：見ることはものすごく大事だと思う。とにかく見れば良い。そういうことなんだと、大人が言うことはない。私の展覧会において、怖くて入れないという子供がいた。判るものではないが見ておく、記憶させておくと次につながる。第一印象が大事。怖くて入れなかった子供が、この作品なら好きと言ってくれるようになった。本当は子供達に私が付いてあげられると良いが、そうもいかない。

以上